The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	渋沢青花と相馬黒光、ボース、エロシェンコ
Author(s)	五之治, 昌比呂
Citation	日本語・日本文化. 2015, 42, p. 53-81
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/56920
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

〈研究論文〉

渋沢青花と相馬黒光、ボース、エロシェンコ

五之治　昌比呂

I　はじめに

本稿のきっかけは、稿者が指導教員を務めた日本語・日本文化研修留学生の修了論文である。彼はクマル・ガウリシャンカルというインド人であったが、彼が本センターで研究を始めるに当たって、稿者はラス・ビハリ・ボース（1886–1945）と渋沢青花（1889–1983）によるインド民話集を研究テーマとして勧めた。その研究成果は修了論文としてまとめられ、本センターの『日本語・日本文化研修留学生修了論文集 12』に収載されている。これはなかなかの好論文であるが、時間の制約などもあり、いくつかの点については残念ながら不十分な状態にとどまっていると言わざるを得ない。本稿の目的はそれを補うこと、また、調査によって新たに明らかになった事実を紹介することである。

渋沢青花とラス・ビハリ・ボースについてとりあえず簡単に紹介する。渋沢青花は様々な著作を残しているが、一般に児童文学作家として知られている。彼は明治 22 年（1889）に東京京橋区の八丁堀に生まれた。本名は寿三郎である。すぐに浅草千束町に移り、この地で少年期をすごした。早稲田大学卒業後、実業之日本社に入社し、おもに『少女の友』『日本少年』『小学男生』といった雑誌の編集に携わった。また、自身も少年少女向けの物語や劇を創作し、これらの雑誌に掲載した。大正 12 年（1923）に関東大震災が起こると、これを契機に実業之日本社を退社する。その後は児童文学作品の執筆に専念し、昭和 11 年（1936）に日本児童文化協会が設立された際にはその中心となった。晩年は『浅草っ子』（1976）、『大正の「日本少年」と「少女の友」』（1981、以下『大正の』）、『九十四年を振返って』（1984、以下『九十四年』）といった回想記を執筆し、昭和 58 年

（1983）5月に94歳で天寿をまっとうした。

ラス・ビハリ・ボースは1886年にインドのスバルダハという村に生まれた。彼は1906年ごろからインド独立運動に加わるが、武装蜂起に失敗した後、逃亡生活を余儀なくされ、1915年6月に身元を偽って日本にやってきた。国外退去となる寸前に、中村屋の相馬愛蔵、黒光夫妻[1]のもとにかくまわれることになった。その後、ボースは相馬夫妻の娘、俊子と結婚することになる。彼は日本からインド独立運動を推進し、第二次世界大戦中は運動の中心人物となるが、1945年1月、独立を前に日本でこの世を去った。

青花とボースは二冊のインド民話集を刊行した。『印度頓知百譚』（1931）と『民間蒐集による　印度民話集』（1935、以下『印度民話集』）である。この民話集が誕生したきっかけは、青花とボースの中村屋での出会いにある。中村屋は、現在では和菓子、洋菓子、パンといった食品の販売やレストラン事業で有名であるが、出発は相馬愛蔵と黒光が東大正門前に開業したパン屋であった。明治42年（1909）に新宿に移転し、そこから徐々に事業を拡大していくことになる。中村屋が喫茶部（レストラン）を始めたのは昭和2年（1927）のことであるが、現在でも名物となっている「インドカリー」はボースが伝えたものである。明治末には中村屋はまだパン屋、菓子店であったが、このころから中村屋は文化サロン的な様相を見せ始める。様々な芸術家、作家、学者らが集まり、交流を行っていた[2]。そのサロンの主宰者と言うべき存在が相馬黒光であった。ボースはその娘婿であり、青花はサロンに集う一人だったのである。

論文を指導していて、どうしてもわからないことがあった。青花と黒光はどのようにして知り合ったのかということである。後で見るように、青花は中村屋、とくに黒光という人物とかなり深い関係があった。それは青花の著作に黒光のことがたくさん出てくることからもわかる。それに対し、黒光の書いたものには青花の名前がまったく見つからない。青花の書いたものにしても、黒光との出会いについて触れているものはない。そのため、二人が知り合ったきっかけは謎であった。クマル氏の論文では二つの可能性を挙げている。ひとつは、黒光の夫、相馬愛蔵である。愛蔵も青花と同じく早稲田大学を卒業しており、そうしたつながりから青花が中村屋と関係を持つようになった可能性が考えられる。もうひとつは

岡田式静座（後述、本稿では引用以外は「座」の漢字で統一する）である。論文では、文献資料から言えることはそこまでであるとしている。

青花と黒光が知り合ったきっかけをさぐるため、稿者は改めて資料を調査してみた。クマル氏の論文では十分に活用できなかった文献の記述を調べてみたところ、様々な新しいことがわかったが、決定的な証拠は見つからなかった。それでもやはり岡田式静座を通じて二人が知り合った可能性が高いという結論にいたり、その経緯についてもある程度の仮説を立てることができた。

さらに調査を進めようとしている途中で重大な見落としに気がついた。東京の日本近代文学館には「渋沢青花文庫」（以下「青花文庫」）というものが存在することである。青花は生前に、自分の著作や原稿のみならず、日記、書簡、葉書、写真など多種多様なものを大量に当館に寄贈し、それがコレクションとなっているのである。この日記や書簡を調べれば、活字資料ではわからなかった経緯が明らかになるかもしれない。そこで青花文庫の該当資料を読む作業に移った。書簡や葉書はほとんど参考にならなかったが、日記はかなりの事実を明らかにしてくれた[3]。日記には活字になっている青花の著作の記述と矛盾するところがあり、活字資料だけを見ていては誤った推測をしてしまうところであった。以下、青花と黒光の出会いを含めた二人の交流と、二人を取り巻く何人かの著名な人物との関わりについて、今回の調査で新たに明らかになったことを述べていきたい。

Ⅱ　青花と相馬黒光

岡田虎二郎と岡田式静座

まず、二人を結びつけたと思われる岡田式静座[4]について簡単に述べる。岡田式静座とは岡田虎二郎（1872–1920）という人物が考案した静座法である。岡田は明治5年三河国渥美郡田原町に生まれ、高等小学校卒業後は農業に従事していたが、心身の開発に興味を抱くようになり、29歳の時に渡米、帰国後に静座法を考案した。明治39年に上京し、心身虚弱者の救済から始めて、徐々に静座法を普及させていった。静座に関する本が出版されて話題になったこともあり、支持者が大幅に増えたため、明治44年には日暮里の本行寺を静座の道場とするようになった。毎朝6時から7時半までそこで静座会が行われ、多数の信奉者が道

場に通って静座を実践した。本行寺以外にも様々な会場で静座会が行われ、岡田と熱心な信奉者たちは日暮里での静座会が終わると、毎日別の会場を回って静座を行った。静座会には実に多様な人々が参加した[5]。著名人の名前だけを挙げてみると、木下尚江、後藤新平、島村抱月、高田早苗、田中正造、坪内逍遙、中原悌二郎、中村彝らがいる。しかし、大正9年10月17日、岡田は尿毒症で急逝してしまう。岡田のカリスマ性によるところの大きかった彼の静座会は自然消滅してしまうが、木下尚江、小林参三郎ら一部の信奉者たちがその後も静座会を続けた。現在も活動している会もある[6]。

相馬黒光と桂井当之助

相馬黒光は岡田式静座の熱心な信奉者であった。彼女が静座を始めたきっかけは、自伝『黙移』に明確に書かれている[7]。それは彼女と親密な関係にあった彫刻家、荻原守衛（碌山）の死であった。大きな精神的ダメージを受けていた黒光に、友人の木下尚江が岡田虎二郎を紹介した。最初は岡田が黒光を定期的に訪ねていたが、明治45年（1912）の初夏から黒光は欠かさず毎日道場に通うようになった。また、日暮里本行寺での静座会が終わった後、中村屋に会場を移して第二の静座会が週二回行われるようになった。岡田が急死したときの黒光のショックは大きく、彼女はその死を機に道場に通うことをきっぱりやめてしまったのであった。

青花と黒光の交流について考える上で、重要な人物がいる。桂井当之助（かつらい・まさのすけ、1887–1915）である。彼は大正2年（1913）に早稲田大学の助教授になった人物であり、おもに哲学を講じていた[8]。しかし、同4年には病気で急逝してしまう。彼に関する資料は乏しいが、黒光は彼と親密な交際をしていたために、『黙移』でかなり詳しく彼のことを書いている（『黙移』235頁以下）。それによれば、桂井は静座を通じて親しくなった仲間の一人であった。桂井を最初に紹介する文章には次のようにある。「この仲間でもっとも特色のあったのは、早稲田大学哲学科出身で、校中最年少の助教授、桂井当之助という人でした。その頃まだ二十七、八歳で、……」（『黙移』236頁）。桂井が早稲田の助教授になったのは大正2年、27歳のときなので、二人が知り合ったのはその年であろうと思われる。

黒光と桂井はともにロシア文学が好きであったことからロシア語の勉強を始めた。そこに片上伸[9]らも加わったが、この勉強会はある事情から立ち消えになってしまった。その後、黒光と桂井は二人で外国文学の読書会を始めた。おもに英訳を用いて、イプセンやロシア作家の作品を読んだ。最後には『カラマーゾフの兄弟』を一年かけて読破した。大正4年（1915）10月上旬のことだという。その二ヶ月後に桂井は腸チフスで急逝する。12月30日の夜のことである。翌日、安置所に横たえられた桂井の遺体をずっと見守っていたときの様子が、『黙移』に詳しく描かれている。

この桂井当之助と青花は親友であった。青花は明治44年（1911）の7月に、友人である加能作次郎らとともに早稲田大学を卒業するはずであった[10]。しかし、3月に結核に感染していると診断され、4月に茅ヶ崎の南湖院に入院した（青花日記による。8月にいったん退院し、大学は9月に試験を受けて卒業した）。そこで療養生活を送る間に、同じく療養患者であった桂井当之助と知り合った（『九十四年』193頁。日記からすると入院の翌日である4月14日に知り合ったようだが簡単な記述しかない）。桂井は早稲田の一年先輩で、青花を弟のようにかわいがってくれたという。青花の日記には桂井のことが頻繁に登場し、それを読む限り桂井は青花の親友と言ってよい存在である。また、桂井が青花に宛てた葉書が『九十四年』の末尾に全部で5通紹介されているが、中には桂井の内面的苦悩を吐露しているものもあり、二人の関係の深さがうかがえる。

青花が静座の信奉者になった経緯

このような事実を前にすれば、桂井が青花と黒光を結びつけたのだろうと考えるのが自然だが、実はそう単純ではない。まずは青花が静座を始めた経緯を知る必要がある。青花は病気から回復を遂げ、大正元年（1912）の11月に実業之日本社に入社する[11]。そのころに青花が岡田式静座を始めたことは、彼の活字になった回想記からわかるのだが、正確にいつから岡田虎二郎の道場に通い出したのかは知ることができない。それは青花の日記を調べることで明らかになった。まず活字資料の方から見てみる。

『大正の』に青花が実業之日本社に入社したときの次のようなエピソードが語

られている。当時は会社の慣習として、社員全員が生命保険の加入を命じられていた。しかし、青花は岡田式静座の熱心な信奉者だったので、信念として、死を予想してそれに備えるということが嫌であり、保険の掛け金をボーナスから天引きする代わりに、それだけの金を貯金してもらいたいと申し出たという（『大正の』215頁）。

この記述を信じるなら、大正元年（1912）の入社時にはすでに静座の熱心な信奉者だったことになる。煩雑になるので詳細は省くが、それが事実ならば、青花が静座に熱中し始めたのは桂井当之助よりも早いことになり、青花の方が桂井を静座に誘ったのではないかと推測するのが自然である[12]。しかし、青花の日記を読んだことで、この『大正の』の記述が正確なものではないことがわかった。青花は入社当時は、静座を始めていたかもしれないが、まだ「熱心な信奉者」ではない。日記によれば、青花が日暮里の道場に通うようになったのは大正3年（1914）4月18日のことであり、それは桂井から強く勧められたからと思われる。

青花の日記で最も早い「静座」への言及は、大正元年（1912）9月29日の日記である。そこに俳句が書き付けてあり、「野分吹く弱気心を静座かな」と読める。この「静座」が岡田式静座であるかどうかはわからない。そうであれば、就職前の時点で少なくとも自主的に静座を始めていたことになる。次の言及は、明らかに岡田式静座である。大正2年4月17日の日記に「今日から坪内さんのところへ静座をやりにいく」という記述がある。「坪内さん」とは坪内逍遙のことである。逍遙は自宅で岡田を招いて静座会を行っていた[13]。また、次の年の4月17日の記述によると、1年前の今日は「初めて静座をやりに行つた日」だと言っている。これが本当ならば、大正2年の4月17日から本格的に静座を始めたことになる。

日記を読む限り、青花は静座を始めはしたが、それほど熱心に取り組んでいるとは言えない。一方、大正2年（1913）5月4日の日記には、桂井当之助のところへ遊びに行くと桂井がしきりに静座の効能を説いたとある。つまり、静座の熱心な実践者になったのは桂井の方が先ということだ。12月27日の日記には、桂井が遊びに来て、日暮里に静座をしに行くように勧めたことが記されている。この時点では青花はまだ日暮里に行っていないということである。

先に述べたように、日暮里の道場に通うようになったのは大正3年（1914）

4月18日のことである。その二日前の日記には、日暮里に通うことにしたので坪内先生の静座会をひとまず脱会したと書かれている。次の日の日記では、坪内逍遥の静座会に来ていた岡田虎二郎に断って日暮里に通うことにしたと言っている。それからどれくらいの頻度で日暮里の道場に通っていたのか、日記からは判然としない。静座のことを毎回日記に書くことはしていないからである。

青花は大正4年（1915）の10月ぐらいから静座に熱を入れだしたようである。25日の日記からは、日暮里だけではなく桂井の家や、後に青花の妻となる石原八重子の家でも定期的に静座をするようになったことがうかがえる。そのような中、先述のように桂井が急死する。日記によると、青花は12月19日、日暮里の道場に顔を見せなくなった桂井を心配して彼の家を訪ねた。そのときにはすでに病状は重くなっていた。チフスらしいと書いている。30日には桂井の姉から電話をもらい病院に駆けつけるが、桂井は瀕死の状態であった。意識が朦朧としていたが、いっとき意識が戻って青花のことを認識したという。青花はいったん家に帰る。その少し後、桂井は息を引き取った。31日の日記の欄外に桂井の死についての記述がある。朝、病院に行くと、「相馬さん」が来ていて、昨晩の10時40分頃亡くなったことを聞かされた。青花は「唯一人の友やうにある人を失つてがつかりしてしまつた」と悲痛な思いを記している。

以上が、大正4年（1915）までの経緯について、青花日記から読み取れることである。青花が静座を始めたきっかけは結局のところわからない。自分で興味を持ち本で学んだのか[14]、桂井から教えられたのか。可能性が高いのは、早稲田大学関係の誰かに誘われて坪内逍遥の静座会に参加したということであろう。それはともかく、青花が日暮里の道場に通うまでになったのは、桂井に熱心に勧められたことが一番の理由である。大正4年10月頃には静座の熱心な信奉者になっていた青花であるが、もちろん桂井の死後も静座を続けた[15]。

青花と相馬黒光の交際

それでは、青花はどのようにして相馬黒光と親しくなったのであろうか。この点については、残念ながら回想記、日記とも決定的な記述がない。最初に日記に記述が現れるのは、先に触れた桂井当之助の死の翌日、大正4年（1915）大晦日

の日記であり、「相馬さん」と言及されている。黒光と桂井は大正2年から親密な交際を続けていたのだから、桂井の親友であった青花はどこかの時点で、おそらくは日暮里の道場で、桂井から黒光を紹介されたのだと考えるのが自然ではないだろうか。しかし、そのようなことはなかったようである。黒光は有名人なので青花は彼女のことを認識していたであろう。しかし、黒光の方は、大正4年の大晦日の時点ではせいぜい青花の顔を知っている程度であったと思われる。

大正5年（1916）1月15日の日記によると、青花は桂井当之助の家を訪ねた際、桂井の姉から次のような話を聞いた。生前桂井は青花の結婚のことを心配して、「黒光のところへ来る人」を世話したいと黒光に言っていた。黒光は桂井が亡くなった今、自分が代わって世話をしたいが、どちらの人も直接は知らないので、知らない人を世話するわけにはいかない。青花に中村屋にも少し座りに来るように言ってほしいというのである[16]。この時点では黒光は青花のことをほとんど知らない。桂井の思惑はわからないが、自分と黒光との親密な交際のことを青花には話していなかったことがわかる。この結婚話がどうなったのかは日記からはわからない。少なくとも進まなかったのは確かである。この件がきっかけになったのだと思われるが、青花は同年3月から中村屋にも静座をしに行くようになる。3月12日の日記の欄外に「今日から新宿の中村屋へも坐りに行く」とある。その後の日記には、あまり頻繁とは言えないが黒光や中村屋のことが何度か現れる（煩瑣なのでひとつひとつ取り上げることはしない）。どのくらいの頻度で中村屋の静座会に参加していたのかも、日記からは判然としない。日曜日の日記に言及が多いのは確かである。なお、日暮里の静座会には、曜日に関係なくできる限り参加していたことが、日記からうかがえる。

岡田虎二郎が死去するのは大正9年（1920）10月17日であるが、青花はかなり詳しく当日のことを日記に書いている。朝、日暮里の道場に行って木下尚江から岡田の死を知らされた。その後、黒光から手紙が来て、今なら先生のお顔を拝見できるから、先生のお宅に行くよう勧められたという。この手紙は現存し、青花文庫に収められている（稲垣（1968）に翻刻されている）。黒光はそのような手紙を多くの人に出したのであろうが、青花にも送っているという事実は、この時点では二人の親交が深まっていたことを示しているだろう。

岡田の死までの日記には黒光との交流の記述はひじょうに少ないが、回想記の方には交流の記述がいくつもある（『大正の』182–183、191頁、『九十四年』30、81、88、124–129頁）。例えば、『九十四年』（88頁）によると、静座仲間の間で仏像の勉強がはやったとき、黒光から「渋沢さん、こんど一緒に奈良へ行きましょうよ」と誘われたという[17]。

岡田虎二郎の死後、黒光は静座をやめてしまうが、青花と黒光の交際は続いた。自然と中村屋に集う人々とも関係を持つことになる。その中でも最も有名な人物といえば、ラス・ビハリ・ボースとワシリー・エロシェンコである。次の章からは、この二人について今回の調査で新たに明らかになったことを紹介したい。おそらく、青花の日記を丹念に読めば、黒光との交際についてもっといろいろなことがわかるのだと思う。しかし、戦後の日記はかなりの量があり、今回の調査では黒光が亡くなるころまでの分しか目を通すことができなかった。そのため、ボース、エロシェンコ関係以外の黒光との交際については次のことを記すにとどめたい[18]。

戦後、青花はかなり頻繁に調布の黒光のもとを訪ねていた。それは後で見るように明確な目的がある場合もあるが、単に会いに行ったということも多かったようだ。昭和29年（1954）2月14日に相馬愛蔵が死去すると青花は弔問に訪れ、四十九日の法要にも参会している。黒光はその翌年の3月2日に79歳でこの世を去った。青花はそれを翌日の夕刊で知り、すぐに黒光宅に駆けつけた。6日の葬儀にも参列している。日記には「午後、中村屋のおかみさんのお骨あげにゆく」とある。黒光の死をきっかけに、何か黒光との想い出のようなものが書いてあるのではないかと期待したが、日記には残念ながらそのようなものはなかった。黒光の死後、彼女が集めた寄付と自らの資金により、「黒光ホーム」と呼ばれる老人ホームが設立された。青花はこの黒光ホームに入所し、晩年を過ごしている。

Ⅲ　青花とラス・ビハリ・ボース

ラス・ビハリ・ボースについて

まず、ボースについてだが、彼について詳述することは避け、中村屋との関係のみを簡単に紹介する（以下の情報はおもに中島（2005）による）。先に述べたよ

うに、ボースは大正4年（1915）6月に身元を偽って日本へ渡航した。同年11月末、イギリスがボース（とその同士のグプター）を国外退去させるよう日本政府に要請したため、ボースは窮地に陥った。日本を出たらイギリス官憲に捕まり、いずれ死刑になることは確実だからである。ボースとグプターは頭山満に助けを求めるが、頭山は二人をとりあえず中村屋に隠すことにする。12月1日の夜中のことである。これはちょうど相馬黒光と桂井当之助が親密な交際をしていた時期に当たる。黒光は桂井にはボースのことを打ち明けている(『黙移』239頁以下)。その直後の12月30日に桂井は急逝してしまうのである。

翌年の3月、日本政府はある事件をきっかけにボースとグプターの国外退去命令を撤回した。それを受けてボースは中村屋の隠れ家を出ることになったが、イギリス官憲から追われる立場に変わりはなく、隠れ家を転々とする生活が始まった。その生活に終止符が打たれるのは、大正7年（1918）11月の第一次世界大戦の終結時である。その間、頭山ら支持者とボースとの連絡係を務めたのが、相馬夫妻の長女俊子であった。そうしたきっかけから、大正7年の7月にボースと俊子は結婚することになる。二人は長男、長女をもうけ、ボースは大正12年に日本に帰化するが、翌年には俊子が急逝してしまう。ボースはインドに戻ることなく、主として日本からインド独立運動を推進した。昭和20年(1945)1月21日、彼はインドの独立を目にする前に日本で没している。

インド民話集の出版

ボースはラビンドラナート・タゴールが来日した際、会談を行っている[9]。その中でタゴールから政治ばかりではなく文化も重視すべきであると言われ、インドの民話を日本に紹介することを思いついた。その結果生まれたのが『印度頓知百譚』（1931）と『印度民話集』（1936）という二冊の民話集である。ボースと青花の共訳となっているが、ほぼすべての作業を青花が行ったものと思われる（現代教養文庫版『インドとんち百話』3頁の青花の「前書き」による)。

『印度頓知百譚』の中で、その粉本が何であるかは記されていないが、クマル(2010）は次の書であることを明らかにしている。

Sastri, S. M. N. et al., *184 Indian tales of fun, folly and folk-lore*, G.A NATESAN & CO, Madras (Chennai), 1920

この本から116話を選んでいるが、ほとんど粉本の翻訳と言ってよい。『印度頓知百譚』の詳細はクマル氏の論文を参照していただきたい。

クマル氏の論文では『印度民話集』の方はあまり詳しく扱われていない。粉本が見つからなかったことがその大きな理由である。『印度民話集』は1979年に社会思想社から現代教養文庫として『インド民話集』のタイトルで再刊されるが、青花はその前書きで次のように述べている。

> 『印度頓知百譚』が出版された後で、ボース氏夫人の母君である、新宿中村屋の相馬黒光女史が、わたしに一冊の書を示し、「渋沢さん、これもお訳しになってはどうですか」といわれた。題名をはっきり記憶しないが、たぶん "Indian fairy book" だった。拝借して読んでみると大層面白い。そこで早速翻訳して出版した。(『インド民話集』3頁)

出版のきっかけは黒光の勧めであったことがわかる。ただし、粉本に関する記述は正しくない。この記述に引きずられたために、クマル氏の論文を指導していたときには粉本を見つけることができなかった。元の『印度民話集』の「序」で青花は、「インドにおいて出版されたインド人の多くの民話集を原として、その中から自分が取捨選択して訳出した」と述べているが、実はこちらの方が事実に近かったのである。稿者が改めて調べてみたところ、『印度民話集』の粉本は次の三冊であることがわかった。

(1) Lal Behari Day, *Folk-tales of Bengal*, Macmillan, London, 1883
(2) Shaikh Chilli, *Folk-tales of Hindustan*, Panini Office, Allahabad, 1913 (2nd edition)
(3) Shovona Devi, *The Orient Pearls: Indian Folk-lore*, Macmillan, London, 1915

青花は（1）から9話、(2）から5話、(3）から11話を選んで訳出している。『印

度民話集』においては特に章分けをせずに25話を並べているが、(1) からの民話、(2) からの民話、(3) からの民話という順番で並べている。また、それぞれのまとまりの中での話の順番は粉本には従っていない。

さて、青花の日記であるが、ボースが生きていた時期の日記にはボースへの言及がまったくない。『印度頓知百譚』と『印度民話集』を企画し執筆していた時期の日記はそもそも存在せず、残念ながら、日記から二人の交流について知ることはできないのである。

『アジアのめざめ』への青花の寄与

ボースが死去してから8年後、相馬黒光は彼を記念する一冊の本を出版した。『アジアのめざめ　印度志士ビハリ・ボースと日本』（以下『アジアのめざめ』）と題する本で、黒光と息子の安雄の共著という体裁になっている。内容は、安雄によるボースの伝記、ボース自身による自伝的文章（既存のものの再録）、ボースと親しかった人々が寄稿した文章、最後に黒光による回想といった構成である。相馬安雄による序文の末尾に協力者への謝辞があるが、そこに「本書をまとめるにあたってお手伝いくださつた渋沢青花氏、小田仁二郎氏」として青花の名が挙げられている。

青花は実際に何をしたのか。それは彼の『九十四年』と日記を読むことで明らかになる。まず『九十四年』によれば、青花は黒光から、ボースの伝記を作るためにボースと関係のあった人々を訪問するよう依頼された。彼は黒光の指名する人々を訪ねて歩き、聴き取った話を原稿にして黒光に渡していたという（『九十四年』127頁）。日記を読むと、実は青花はそれ以上のことをしていたことがわかる。もちろん『九十四年』に書かれている仕事は実際に行っていた。それだけではなく、彼はボースの伝記の部分を執筆していたのである。

青花の日記にボースの伝記のことが初めて出てくるのは、昭和25年（1950）10月14日であり、愛蔵・黒光の居宅を訪ねて伝記の相談をしている。その後、青花は頻繁に相馬家を訪れ、伝記の相談に加えて、調査の報告をしたり、原稿を渡したりしている。煩雑になるのでひとつひとつ紹介することはしないが、昭和26年の日記には伝記のために行った活動に関するかなりの数の記述がある。ま

た、青花は相馬安雄や、ボースの長女である樋口哲子からボースに関する話を聞いたり、様々な資料を借りたりしている。それは、実はボースの伝記を自分が書くためであった。上記のボースの知人からの聞き書きに加えて、青花は伝記の一部を書き終えると、そのたびに黒光のもとに届けていた。最後の伝記の原稿を届けたのが昭和26年11月20日で、その後すぐ原稿全体に手を入れる作業を行っている。11月30日の日記には、「ボース伝」（三百八十八枚）が完成したので午後調布へ届けにゆく、とある。

『アジアのめざめ』のボースの伝記は相馬安雄の名義になっているが、その下原稿を執筆したのは青花なのである。中村屋の経営で多忙な相馬安雄が、大量の資料をつき合わせてボースの伝記を執筆するなどというのは、現実的ではないであろう。青花に代筆させたのはごく自然なことであるし、『アジアのめざめ』は相馬黒光と安雄が企画し出版した本なのだから、伝記の部分の著者を安雄にするのも当然のことであろう。ただし、「三百八十八枚」というのが四百字詰め原稿用紙での数字であれば、『アジアのめざめ』の伝記の部分の量を上回る量になる。つまり、相馬安雄は青花の原稿にかなりの手を入れて『アジアのめざめ』の形に編集したはずである。それがどの部分でどの程度なのかは、もちろん今となってはわからない。

すでに記したように、青花はボースの伝記の部分を執筆するだけでなく、ボースの知人たちを訪ねてその談話を文章にしていた。昭和26年（1951）の日記を読むとそうした記述がたくさん見つかる。実は、その談話の筆記が残っていることが明らかになった。青花は戦時中と終戦直後（昭和19～22年）の日記に「農事日記」という名前を付けているが、この「農事日記（二）」の余ったページに、昭和26年の聞き書きなどの記録を書き込んでいたのである。「ボース傳資料　メモ」とタイトルが付いている[20]。

先述のように、『アジアのめざめ』にはボースの知人たちの回想記が収録されているが、青花の聞き書きによるものは、おそらく銀座の寿司屋「久兵衛」の主人の談話のみである（「ボース傳資料　メモ」には記録がないが10月22日の日記に訪問の記述がある）。それ以外の回想記はそれぞれの人物が自分で書いた文章を寄稿したものと思われる。青花の「メモ」に談話の記録が残っており、かつ

『アジアのめざめ』にも回想記を寄稿しているのは大川周明と木村日紀であるが、両者の回想記とも「メモ」とは内容が異なっている。

つまり、青花の聞き書きはボースの伝記の部分を自分が書くためのものだったのである。青花が会って話を聞いた人物は、日記と「メモ」から次の人々であったことがわかる。日記に登場する順番に名前を列挙する。葛生能世（能久）、木村日紀、A. M. ナイル、河辺正之、大川周明、岩畔豪雄、北辺邦雄（メモでは北部和雄）、「久兵衛」主人（日記のみ）、秦学文（日記のみ）、藤原岩市（メモのみ）、加えて相馬黒光、安雄、樋口哲子と中村屋の元従業員らである。

青花が取ってきた談話が伝記で使われている例として、大川周明の談話を紹介しておく。ボースと大川は親しい友人であったが、二人が最初に会ったのは1915年に国外退去命令を受け頭山満を頼っていたときのことであろう（中島（2005: 84）参照）。ボースが日本でインド独立運動を開始してからは、大川の主催する行地社の機関誌にいくつかの文章を発表した。また、独立運動の一環として彼は日本各地で講演を行っていたが、酒田で講演を行った際には、酒田が故郷である大川も同行した（中島（2005: 211）参照）。このときのエピソードが『アジアのめざめ』の伝記に紹介されているが（59頁）、これは青花の「メモ」に基づくものである。メモによれば、一日暇があったので、二人は日本海に船を浮かべた。沈む夕日を見ていたボースは、突然、「寂しい」と叫んで、船底に身を伏せて慟哭したという[21]。

他の例を簡単に紹介する。『アジアのめざめ』の伝記に「孫文の手紙とボースの遺言」という章があるが（138頁以下）、ここの記述はおもに葛生能世からの聞き書きを使っている。また「臨終」の章（141頁以下）は相馬安雄の一人称の叙述になっているが、ここには安雄本人からの聞き書きに加えて黒光と樋口哲子の談話が使われている。

今回青花の日記を調査していて、もうひとつ発見をしたのでここに報告しておく。「農事日記（二）」の「ボース傳資料　メモ」のところには、二葉の紙が挟まれていた。一枚はバンコックを中心にアジアの諸都市の名前を記してそれを線で結んだもの、もう一枚は樋口哲子氏から借りた資料の一覧である。当然ながら後者が重要である。新聞切り抜き帳や写真、ボースの著作など14点の資料の名が

並んでいるが、中でも注目される資料は「ボース氏日記（一九一六年）」「讃岐丸航中の日記．罫紙二枚」である。1916年といえばボースが3月半ばまで中村屋にかくまわれ、その後も隠れ家を転々としていた時期である。「讃岐丸航中の日記」の方であるが、「讃岐丸」とはボースがインドを脱出し日本にやって来る際に乗船していた船である。『アジアのめざめ』に「八、印度脱出の記」というボース自身の文章があるが、この日記に基づくものと思われる（「印度の青年に読ませるために書き送つたものを、中山利国氏が訳されたもの」を転載したものとのこと）。昭和27年（1952）4月1日の青花の日記には、ボースの日記を調布の相馬家へ届けてもらうように中村屋の事務所に預けた、という記述があるが、この二つの日記のことであろう。この時点では日記は確かに存在していた。残念ながらその後散逸してしまったようだ。樋口哲子氏はボース関連資料を大東文化大学に寄贈しているが、大学のOPACで見た限りでは、その資料に日記は含まれていない。二つとも、残っていれば貴重な資料であったことは確実であり、失われてしまったのが惜しまれる[22]。

青花がボース伝の仕事をしていた時期、彼の生活は苦しかった。日記には、蔵書を売って金に換えるという記述がひじょうにたくさんある。黒光からこの仕事の話を持ちかけられた際、青花にとっては渡りに船であっただろう。とはいえ、この仕事のために黒光が青花を選んだという事実は、二人の関係の深さをよく示しているのではないだろうか[23]。

『アジアのめざめ』が出版されたのは昭和28年（1953）である。奥付では発行は2月28日となっているが、青花日記によると青花は3月10日の新聞広告でその出版を知った。翌日、青花はお祝いを言うために中村屋へ行き、相馬安雄に会った。安雄は、ちょうど本が届いて自宅へ運ぶところで、世話になった人たちにもお礼のお菓子といつしよに送るつもりだったと言った。青花は『アジアのめざめ』を二冊とお菓子をもらって帰ったという。

Ⅳ　青花とワシリー・エロシェンコ

ワシリー・エロシェンコについて

ワシリー・エロシェンコ（1890–1952）という人物についても簡単に紹介する

にとどめる[24]。彼は1890年にロシアのベルゴロド州で生まれた。4歳の時に麻疹のために失明し、モスクワやイギリスの盲学校で学ぶ。その中で日本では視覚障害者がマッサージ師として自立していることを聞き、日本へ渡ることを決意する。彼はエスペラントをマスターしていたことから、最初は日本のエスペランティストを頼って日本での生活を始めた。大正3年（1914）4月のことである。東京盲学校で日本語やマッサージを学びながら交友関係を広げていき、秋田雨雀、神近市子らと親しくなった。エロシェンコを中村屋の相馬夫妻に紹介したのはこの二人である[25]。

大正5年（1916）になるとエロシェンコは収入の道がなくなり生活に困窮する。そこで4月初旬、相馬愛蔵が彼を新宿の中村屋へ連れてきて住まわせた。上述のボースをかくまっていた離れである。エロシェンコはその年の7月には東南アジア諸国への旅に出る。大正8年7月に日本に戻ってくると、再び中村屋に住まうことになった。大正10年の5月28日夜、警官が中村屋に押し入りエロシェンコを逮捕した。日本政府が彼をロシア共産党員と思い込んだからである。彼は国外退去処分となり、6月に日本を離れることとなった。その後は中国で活動し、最後はロシアに戻った。1952年に生まれ故郷で没している。

彼はしばしば「盲目の詩人」と呼ばれるが、実際は童話作品を多く残した。彼が童話を書き始めたのは日本滞在中のことである。日本追放後もエスペラントで童話を書いて発表した。彼の残した作品やエッセイなどは高杉一郎氏の手により『エロシェンコ全集』（みすず書房、全三巻）にまとめられている。

青花が撮影したエロシェンコの写真

エロシェンコと黒光の交流については、黒光自身が『黙移』で詳しく書いているし、他の文献もあるので本稿では詳述しない（『黙移』262頁以下、高杉（1982: 120-）、宇津（1992）参照）。黒光は熱心にエロシェンコの面倒を見てやったし、彼も黒光のことをたいへん慕っていた。ここでは、青花に関わることだけをまとめておく。まずは青花の回想記の一部をそのまま引用したい。

わたしはしばしば中村屋を訪れたので、なんどか逢う機会があった。よく

ギターを抱えて、なにか悲しい曲を奏でていた。それがわたしの心を魅きつけたし、また写真に熱中していた時代でもあったので、乞うて、ギターをひいているところ、バイオリンを弾いているところ、またおかみさん（黒光女史のこと。みな奥さんと言わないで、おかみさんと呼んでいた。たぶん商人の妻となった以上、おかみさんと呼んでくれと、本人が要望していたのだろう。だが木下尚江さんだけは昔なじみで、お良さんと言っていた）がオルガンをひき、エロシェンコがバイオリンをひいて合奏しているところなどをカメラにおさめた。そのフィルムは、最近中村屋に寄付し、また引伸ばしたものを日本近代文学館に寄贈した。（『大正の』182–183頁）

このように、青花とエロシェンコは交流があった。しかし、青花の日記にはエロシェンコに関する記述は見られない。回想記のわずかな記述しか資料がない。青花文庫の資料が日本近代文学館に収められた際に青花が寄稿した文章、「静座の波紋と中村屋」には次のような内容の記述がある。エロシェンコとは何回となく会って写真を撮らせてもらった。当時、中村彝のエロシェンコの絵が評判になっており、鶴田吾郎も彼の肖像を描いていたので、自分も写真で傑作を撮ろうと思ったのであった。撮った写真は、ギターを弾いたりヴァイオリンを弾いたりするポーズと、黒光がオルガンを弾きエロシェンコがヴァイオリンを弾く合奏のシーンである。これらのフィルムは中村屋に寄贈したが、引き伸ばした写真を日本近代文学館にも寄贈した。また、いちどエロシェンコと黒光といっしょに芝居を見に行ったことがある。目の見えない彼に何がわかるのだろうと思ったが、感で楽しむことができるということだった。日本語も少しはわかったし、黒光さんの説明で舞台を想像することができたのであろう。

二つの文章の中で青花は自分の撮った合奏の写真について言及しているが、これはエロシェンコに関する本や論文でよく掲載される写真のことではないかとすぐに見当がつく[26]。エロシェンコといえば、中村彝と鶴田吾郎による肖像画が有名であるが、黒光とエロシェンコが合奏をしているこの写真もよく目にするものである。新宿の中村屋のレストランにも飾ってあった（稿者が見たのは新宿中村屋ビルの再開発前）。また、中村屋に関する最近の展覧会でも展示されていた[27]。

この写真の撮影者として青花の名が記されているのを見たことがないが、まちがいなく青花である。上の記述のとおり、日本近代文学館の青花文庫にはエロシェンコの写真が収められている。全部で四枚あり、一つは黒光との合奏の写真、あとはエロシェンコ一人でヴァイオリンを弾いている写真と、ギターを弾いている写真、それから正面からのポートレートである。「フィルム」についてはわからないが、合奏の写真は現在新宿中村屋も所有している。稿者が中村屋の広報部に問い合わせたところ、写真の裏には撮影年と思われる「大正8～9年ごろ」という年代と黒光とエロシェンコの名前だけが記されているとのことであり、撮影者が誰であるかを示す資料はないとのことであった。なお、青花文庫の写真と中村屋所蔵の写真とを比べると、前者の方が画面の範囲が少々狭く、後者には写っている左右と上のわずかの部分が切れている。

エロシェンコの童話

もうひとつ、エロシェンコについて青花が伝える注目すべき情報は、童話作品のことである。エロシェンコは日本で二十編あまりの童話と一編の童話劇を書いている。それは『夜明け前の歌』（1921）、『最後の溜息』（1921）、『人類の為めに』（1924）という三冊の本に収録され、その後『エロシェンコ全集』の第一巻に収められた。

青花の『大正の』によれば、エロシェンコは『日本少年』大正10年（1921）1月号に童話「鷲の心」を書いたという（182頁）。また、エロシェンコが童話を書くようになったのは、黒光と相談した結果らしく、ある日、原稿を持って、黒光の長女俊子といっしょに青花の家を訪ねてきた[28]。これを皮切りにして相当数の童話を書くようになった、と言っている（183頁）。『エロシェンコ全集Ⅰ』の高杉一郎氏による「あとがき」では、一部を除いて多くの作品の初出はわからないとされている。『夜明け前の歌』所収の「鷲の心」もそのひとつであるが、上の青花の言葉から、「鷲の心」の初出は判明した[29]。青花は『日本少年』の編集者であるから、「鷲の心」については当然青花が掲載の世話をしたのであろう。稿者は『日本少年』に他にも掲載された作品がないか探してみたが、エロシェンコの日本滞在中に発行された『日本少年』にはなかった。

青花は「これを皮切りにして相当数の童話を書くようになった」と書いているが、これは正確ではない。エロシェンコの文章（口述によるもの）は来日直後からいくつか雑誌に掲載されていたが、彼が本格的に童話を書くようになったきっかけは神近市子のアドバイスである。その経緯は神近自身が伝えている[30]。大正9年（1920）のある日、エロシェンコが自分の家を訪ねてきたが、かなり金に困っている様子だった。それで神近は、ロシア民話のようなものでもいいから何か書きなさい、書いて持ってきたら買ってあげるから、と言った。二三日すると彼は点字のノートを持ってきて、あるお話を神近に口述した。神近はそれを筆記し、手直しして「魚の悲しみ」という題をつけ、玄文社の雑誌『新家庭』に持ち込んだ。原稿は採用され、好評を得たという。神近は時期を書いていないので、実際に『新家庭』を見てみたところ、「魚の悲しみ」は『新家庭』5–7（大正9年7月号）に掲載されていた。明確に童話と言えるものとしては、これがエロシェンコの童話第一作であろう。青花はそのようないきさつは知らなかったようだ。

次にエロシェンコは「沼のほとり」を書いたと神近は言っているが、『新家庭』には掲載されておらず、この作品の初出を突きとめることはできなかった。そのかわり『新家庭』5–9（大正9年9月号）には「木星の人間神」という作品が掲載されている[31]。神近は、その後エロシェンコは来なくなった、童話の原稿書きに追われていたのだろう、二三の早稲田あたりの学生たちが手伝っているという噂だった、と述べている。宇津（1992）によれば、実際に早稲田大学の学生だった伊達豊という人物が協力して日本語の原稿を作成したらしい（宇津（1992: 106–107））。しかし、宇津氏はエロシェンコの童話をおもに筆記したのは黒光だったのではないかと推測している（同107–108）。それが当たっているかどうかは判断できないが、先に挙げた青花の記述からすると、「鷲の心」に関しては黒光が原稿を作成した可能性が高いのではないだろうか[32]。なお、この「鷲の心」は魯迅が「雕的心」として翻訳しており、『東方雑誌』に掲載した後、『エロシェンコ童話集』（1922）に収めている[33]。

相馬夫妻がエロシェンコを中村屋に引き受けたことをきっかけとして、ひとつの文化活動が生まれた。「土の会」という朗読会である[34]。黒光はかねてから外国の演劇に興味を持っており、そうした作品の脚本を朗読することにも関心を抱

いていた。ちょうどその時期、エロシェンコに様々な文学作品の読み聞かせをしていたが、彼がそれをひじょうに喜んでいたため、中村屋で脚本の朗読会を開くことを思いついた。秋田雨雀もちょうどそのとき脚本朗読に関心を持っていたため、彼は積極的にこの朗読会に関わった。会は「土の会」と名付けられた。第一回がいつであったかは不明であるが、第三回が大正9年（1920）6月24日であったことが雨雀日記からわかる。これはエロシェンコの「魚のかなしみ」が『新家庭』に掲載される少し前である。雨雀日記によると大正12年の7月14日が会の最後の記録となっている。参加者の中で有名な人物は、神近市子、佐々木孝丸、花柳はるみなどである。会にはエロシェンコも参加したし、彼の童話の朗読も行われた。その朗読は雨雀日記によると大正9年の11月25日のことである。初出がわかっている範囲でいうと、「無宗教者の殉死」が『我等』12月号に発表される直前である。青花が関わった「鷲の心」が翌年の1月である。そのどちらかが朗読されたのかもしれない。

この「土の会」は実演へと発展する。メンバーたちは朗読に飽き足らなくなり、大正12年には相馬一家の新居の土蔵を改造した小劇場で作品の上演を始めた。それは「土蔵劇場」と呼ばれたが、演劇のメンバーは「先駆座」と名乗った。第一回の公演は4月20日である。同年の9月1日に発生した関東大震災のために劇場も朗読会も立ち消えになってしまったが、先駆座はその後のプロレタリア演劇に引き継がれていくことになる。

中村屋をしばしば訪れていたと語る青花だが、この「土の会」には参加しなかったようだ。雨雀日記の会の記録に青花の名前はない。青花の日記は、大正9年のものも10年のものもわずか四日分ずつしかなく、11年、12年の日記はまったく存在しない（紛失したのではなく書かなかったようだ）。残念ながら青花の日記からは何の情報も得られない[35]。

V　おわりに

最初に述べたように、青花はかなりの数の児童文学を書いているが、文学史的には重要な人物とは言えない。それは確かである。しかし、ほとんど注目されてこなかった彼の著述物を調べることで、相馬黒光、ボース、エロシェンコといっ

た人々に関する新しい事実を明らかにすることができた。特に青花日記は意外な事実をいくつか教えてくれた。今回調査できたのは資料のごく一部である。青花日記は、昭和29年の黒光の死のあたりまでしか読むことができなかったし、黒光に関する記述を追いかけていたので、それ以外のところは細かく読んでいない。今回注目しなかった部分にも何らかの有益な情報が眠っている可能性がある。

例えば、青花と加能作次郎は親友であったし、片上伸は恩師であったが親友のような深い結びつきがあった。それほどではないが、註10）に名前を挙げた早稲田大学同窓生の森下雨村とも親しかった[36]。こうした人々について何か研究をするなら、青花の日記をひもといてみる価値はあるだろう。

より価値のある可能性があるのは、「農事日記」に残された「ボース傳資料メモ」である。関係者の聞き書きには『アジアのめざめ』に使われていないものも多い。例えば、ナイルと相馬安雄の談話メモには、次のような興味深い記述がある。インドが独立したらボースはどんな地位に就くのかということが話題になっていた。しかし、ボース自身は、政治的地位は望まない、インドが独立を果たした後は隠退して悠々自適に暮らすと言っていたという。これは『アジアのめざめ』には取り入れられていない。また、岩畔豪雄、藤原岩市といった第二次世界大戦中の重要人物の談話も『アジアのめざめ』には使われていないようだが、ボースに関することでもそれ以外でも、彼らの談話には何らかの有益な情報が含まれているかもしれない。稿者にはその判断はできないので、今後専門家によって調査がなされることを期待したい。

註

1）紙数の都合上、相馬愛蔵（1870–1954）と黒光（こっこう、1876–1955）についての詳述は避ける。特に黒光の生涯については宇津恭子氏の一連の論文と宇佐美（1997）に詳しい記述がある。なお、黒光は号であり本名は良であるが、もっぱら黒光の名で知られている。

2）詳しくは宇津（1990）、同（1992）参照。

3）青花の日記は明治37年から昭和55年までのものが残されている。途中大きく飛んでいる部分があったり、1年分丸々ない年があったりする。

4）岡田式静座については宇津（1990: 172）がよくまとまっている。他に伊藤（1912）、

中西（1972）、鈴木（2007）も参照。

5) 参加者のリストは、田原市博物館編『中原悌二郎と岡田虎二郎』132–136 頁にある。どれほどの頻度で参加したのかはわからないが、石川啄木、渋沢栄一、頭山満、徳川慶喜、中里介山、長塚節、夏目鏡子、原敬、安田善次郎といった名前も挙がっている。

6) 鈴木（2007）、栗田（2013）参照。

7) 相馬黒光『黙移』225 頁以下。『黙移』の参照ページは平凡社ライブラリー版による。

8) 早稲田大学大学史編集所編『早稲田大学百年史　第二巻』1189 頁。短い人生ではあったが桂井はベルグソンなどの翻訳書をいくつか残している。小林（2005）参照。

9) 片上伸（かたがみ・のぶる、1884–1928）は天絃（弦）の名でも知られる文学者・評論家で、早稲田大学の教師でもあった。ロシアに留学し、早稲田大学文学部にロシア文学科が新設される際に主任教授となったが、もともとは英文学を教えていた。青花が学生のころは英文学の講師であった。同時期に教授として坪内逍遙と島村抱月も英文学科で教えていた。『早稲田大学百年史　第二巻』398–401 頁参照。青花はこの三名の授業に出ており、面識があった。彼らからの書簡や葉書が青花文庫に収められている。特に片上との関係は深かったようで、片上の家に遊びに行ったというような記述が日記に数多く見られる。なお、片上は明治 43 年に桂井当之助の妹と結婚している。また、ロシア留学の準備のため大正 4 年には後述するエロシェンコからロシア語を学んだ。高杉（1982: 115–120）参照。

10) 加能作次郎（かのう・さくじろう、1885–1941）は後に小説家になり、「世の中へ」「乳の匂い」などの作品を残した。加能が青花に宛てた葉書が比較的たくさん青花文庫に収められている。また、青花の日記には加能への言及が頻繁にあり、親友であったと言える。『九十四年』にも加能について書いた部分がいくつかある。二人の同窓生には、河竹繁俊（後に演劇研究者）、森下雨村（後に編集者、作家）、吉田絃二郎（後に小説家）らもいる。

11) 島村抱月が就職の斡旋をしてくれたことが、日記（10 月 10 日、30 日）と『大正の』10–11 頁からわかる。先に述べたように、青花は実業之日本社で主に少年・少女雑誌の編集に携わり、雑誌のために自ら創作も行った。そうした活動については『大正の』に詳しい。

12) 宇津（1992: 83）はその可能性を考えている。

13) 自宅にあった文芸協会付属の演劇研究所で行っていた。伊藤（1912: 27）、宇津（1992: 83）と同注（4）を参照。逍遙の日記には岡田式静座の記述が多くある（菊池明校訂の「逍遙日記」による）。最初に明治 44 年 10 月 24 日に言及があるが、翌年の 2 月 1 日から本格的に静座の会を始めたようである。以後、都合による中断はあ

るが週一回静座会を行っており、日記に「岡田式当日」「静座会」「静心会」といったメモを残している。大正3年11月26日の日記に「静心会解散　満三年と十ヶ月」という記述があり、これをもって静座はやめたようである。なお、青花が早稲田大学在学中、逍遙は教授として英文学を講じていた。そのころから面識があったことが青花日記からわかるが、片上伸とのような親しい関係ではない。大正元年に逍遙から青花に宛てた手紙と葉書が一通ずつ青花文庫に収められており、逍遙日記の大正元年10月10日のところには「渋沢生来」、10月16日には「渋沢寿太郎と市嶋へ介す」（おそらく「寿三郎を」が正しい）とある。青花日記によれば、逍遙は早稲田大学図書館で求人があったのでそれを青花に紹介してくれた。手紙や日記はその際のものである。この就職の話は結局流れてしまった。

14) 偶然であるが青花が入社した実業之日本社から明治45年4月に『岡田式静坐法』という本が出版されている。青花の入社は11月である。

15) 青花の回想記には、自分が静座にひじょうに熱心であったという記述がいくつかある。例えば『大正の』191頁には次のように書いている。青花は「毎朝、暗いうちに起きて、会場である日暮里の本行寺に通っていた」。そして、「本行寺の静座がすむと、続いて第二会場の中村屋へ回って、そこが済んでからいったん帰宅し、出社することにしていた」。これらの記述からはその時期を特定することができないが、少なくとも大正4年以降のことである。

16) 岡田虎二郎は早朝に日暮里での静座会を終えると、日替わりで様々な会場を回って次の静座会を行っていたが、新宿中村屋もそのひとつであった。中西（1972）によると、岡田の晩年、中村屋は月曜日の第二会場になっていた。青花が中村屋に静座に行ったことを日記に記しているのは日曜日が多い。これは、岡田が参加しない、黒光による自主的な静座会だったのかもしれないが、青花の日記には日曜日の中村屋の静座会に岡田が参加している記述もある。

17) このことは青花が『日本近代文学館』に寄せた文章でも書いている（「静座の波紋と中村屋」8頁）。

18) もうひとつ黒光との交流についてここに紹介する。大正の末、青花は「東洋童話叢書」の刊行を企画し、『支那童話三十篇』『西蔵童話二十篇』『台湾童話五十篇』を第一出版協会から出版した。次に朝鮮の民話集を出そうとして台湾旅行の帰りに朝鮮に寄ることにした。その際、黒光が朝鮮で秦学文を尋ねるようアドバイスしたという。これは青花の『朝鮮民話集』の「前がき」に書いてある。青花は昭和2年に原稿を完成させたが、出版社が倒産してお蔵入りになってしまった。原稿は1980年に現代教養文庫の一冊、『朝鮮民話集』として出版された。

19) 『印度民話集』のボースの序文による。このタゴールとの会談は1929年のことと

思われる。クマル（2010: 50–51）参照。

20) 実はこのこと自体は、『日本近代文学館年誌』の「渋沢青花『農事日記』」に付された徳永美樹氏による解題で指摘されている。しかし、それ以後特に注目されなかったようだ。

21) このエピソードについては中島（2005: 211）も参照。青花の日記によると、青花が大川にインタビューしたのは昭和26年7月7日のことである。青花は当然その前に依頼をしていたが、大川は会見を嫌がるだろうと予想していた。ところが返信には快諾の旨が書かれていた。そのうえ、親切にも自宅と新宿間の電車とバスの時間が細かく記されていた。実際に会って話してみると、精神を病んだ後のような様子がまるでなかったという。なお、『アジアのめざめ』所収の大川の回想記「ラス・ビハーリ・ボース君の想い出」は、注目すべき情報がほとんどない、内容の薄いものである。

22) そのため中島（2005）ではもちろん利用されていない。同書55頁、注（1）では、船中の日記の存在が指摘されているが、「現存するかどうか不明」と書かれている。また、同書329頁によると、ボース関係の貴重な資料を中島氏に渡す際、樋口哲子氏は「ほとんどのものは戦争で焼けちゃったのよね」と言ったというが、これら二つの日記については戦後も存在していたのである。

23) 青花は黒光のためにもうひとつ下原稿を書いている。『私の人生訓』（誠文堂新光社、1952年）というアンソロジーに収められている相馬愛蔵の「商売は地道に」という文章である。昭和27年（1952）の青花日記によれば、愛蔵が病気で体調が思わしくないために「代筆」を頼まれた。ただし、文章を読むかぎり青花が創作できるような内容ではないので、これは愛蔵から聴き取ったことを青花が文章にまとめたものと思われる。

24) エロシェンコについて詳しくは高杉（1982）と藤井（1989）を参照。

25) もともと神近はエロシェンコと面識がなかったようだ。神近（1963）によれば、雨雀に東大で行われるエロシェンコの講演会に誘われたのが最初である。そこに黒光も来ていた。神近は黒光と面識があったので、講演会の後で雨雀とエロシェンコを黒光に紹介した。そのまま4人で東大近くにあった中村屋の支店で歓談した。その後エロシェンコは自分で黒光のもとを訪れるようになったらしく、しばらくすると、新宿中村屋にエロシェンコを連れて行ったという黒光からの手紙が神近のところへ来たという。この4人の出会いの日時については、大正4年の9月とされているが、6月の可能性もある。宇津（1992: 89）と同注（9）参照。

26) 新宿中村屋のウェブサイト（https://www.nakamuraya.co.jp/）で、「歴史・おいしさの秘密」→「創業者ゆかりの人々」→「ワシリー・エロシェンコ」とたどってい

くとその画像を簡単に見ることができる（2014年12月現在）。

27) 2011年2月19日から4月10日まで新宿歴史博物館において開催された『新宿中村屋に咲いた文化芸術』。2014年10月に開業した新宿中村屋ビルには「中村屋サロン美術館」が設置された。その第一回展覧会『中村屋サロン―ここで生まれた、ここから生まれた―』にもこの写真が展示されていた。

28) 青花文庫所収の黒光から青花に宛てた封書のひとつにエロシェンコの原稿について触れたものがあるが、断片的で詳細はよく分からない（日付はない）。当然ながら、この『大正の』の記述との関係も不明である。

29) 初出の分かる他の作品については、『エロシェンコ全集Ⅰ』の「あとがき」に情報がある。また、皓星社の「雑誌記事索引集成」を参照すると『我等』『太陽』などに掲載されたいくつかの作品の初出が分かる。

30) 神近（1963: 234–235）。同（1965）にも同じことが書いてある。記事に先立つ1959年2月6日、中村屋で開かれたエロシェンコ追悼会において神近は同様の話をしている。高杉（1997: 166–168）参照。

31) 同じ玄文社の雑誌『花形』大正9年9月号には「カナリヤの死」が掲載されている。神近が関わったのはこのあたりまでであろうか。以後『新家庭』には次のようにエロシェンコの作品が掲載された。「露西亜の楽器」（11月号、エッセイ、『エロシェンコ全集』に収録されていない）、「春の夜の夢」（大正10年4月号）、「学者の頭」（同6月号）。

32) 「木星の人間神」「カナリアの死」から「鷲の心」までの間でいうと、「恩寵の濫費」「無宗教者の殉死」という童話が雑誌『我等』の10月号、12月号に掲載されたことが、少なくともわかっている（『エロシェンコ全集Ⅰ』「あとがき」519頁による）。これらは黒光や早稲田の学生が筆記したものであろうか。

33) この点に関しては劉（2009）参照。

34) この点に関しては宇津（1992: 90–）に詳しい。

35) ちなみに青花と雨雀は面識があった。大正5年12月11日の雨雀日記には、「少女の友」の渋沢君がきた、とあり、連載小説の相談をしたことが記されている。また、28日には、「少女の友」の原稿を完成させ上野の渋沢君のところへもっていったとある（青花は不在だった）。ただし、当時雨雀にとって青花は雑誌編集者以上の存在ではなかったようだ。この時期の雨雀日記には他に言及がない。その後は親しくなった可能性がある。雨雀から青花に宛てた葉書（日付は昭和34年10月10日）が青花文庫に残っている。

36) 森下雨村（もりした・うそん、本名岩太郎、1890–1965）は大学を卒業後、大正の初めには新聞記者をしていた。その給料だけでは生活が苦しく、他に原稿を書い

てしのいでいたところ、青花に自分が編集している雑誌に小説を書くよう勧められた。主に少年向けの科学小説、冒険小説である。その後、雨村は博文館に入社し『新青年』の編集者として活躍した。内外の探偵小説の紹介・普及に努め、江戸川乱歩、横溝正史らを育てた功績は大きいとされる。博文館に入社できたのは雨村と青花の師である長谷川天渓の斡旋による。しかし、ごく間接的にではあるが、雨村の活躍には青花も一役買っているわけである。こうした点に関しては、『大正の』62 頁以下、森下（2007: 32, 42–43）を参照。青花文庫には雨村から青花に宛てた葉書が 6 点収められており、生涯の友だったことがわかるが、内容的には重要とは言えない。青花日記に関しては、稿者は雨村の情報は調べていない。

参考文献

渋沢青花の関連著作

『印度頓知百譚』厚生閣出版，1931（ラス・ビハリ・ボースとの共著）

『民間蒐集による　印度民話集』郷土研究社，1935（ラス・ビハリ・ボースとの共著）

「静座の波紋と中村屋」『日本近代文学館』6，日本近代文学館，1972(3), 8

「渋沢青花宛書簡（一）」『日本近代文学館』44，日本近代文学館，1978(7), 11–12

「渋沢青花宛書簡（二）」『日本近代文学館』45，日本近代文学館，1978(9), 10–11

『インドとんち百話』社会思想社現代教養文庫，1979（『印度頓知百譚』の文庫化）

『インド民話集』社会思想社現代教養文庫，1979（『民間蒐集による　印度民話集』の文庫化）

『浅草っ子　増補改訂版』造形社，1980（初版 1976）

『朝鮮民話集』社会思想社現代教養文庫，1980

『大正の「日本少年」と「少女の友」：編集の思い出』千人社，1981

『九十四年を振返って』私家版，1984

「渋沢青花『農事日記』」（徳永美樹解題）『日本近代文学館年誌』1，日本近代文学館，2005, 181–187

その他の参考文献

秋田雨雀（1953）『雨雀自伝』新評論社

伊藤銀月（1912）『岡田式呼吸静坐法と実験』文栄閣

稲垣達郎（1968）「渋沢青花氏宛諸家書簡」『日本近代文学館図書・資料委員会ニュース』7，日本近代文学館，3

宇佐美承（1997）『新宿中村屋　相馬黒光』集英社

宇津恭子（1983）「ワシーリィ・エロシェンコの童話と相馬黒光」『清泉女学院短期大学研究紀要』1，清泉女学院短期大学，13–23
――――（1990）「相馬黒光―中村屋創業と静坐の時代―」『清泉女子大学人文科学研究所紀要』12，清泉女子大学人文科学研究所，135–199
――――（1992）「中村屋サロンにおける相馬黒光」『清泉女子大学人文科学研究所紀要』14，清泉女子大学人文科学研究所，79–141
――――（1994）「相馬黒光：『黙移』口述の背景」『清泉女子大学人文科学研究所紀要』16，清泉女子大学人文科学研究所，33–102
――――（1996）「相馬黒光：『黙移』刊行から「広瀬川の畔」連載まで」『清泉女子大学人文科学研究所紀要』17，清泉女子大学人文科学研究所，111–167
――――（2000）「相馬黒光：庶民社会の先覚者」『清泉女子大学人文科学研究所紀要』21，清泉女子大学人文科学研究所，57–111
――――（2003）「相馬黒光―インド独立志士の母―」『清泉女子大学人文科学研究所紀要』24，清泉女子大学人文科学研究所，39–86
――――（2004）「相馬黒光の晩年」『清泉女子大学人文科学研究所紀要』25，清泉女子大学人文科学研究所，59–133
尾崎宏次編（1965）『秋田雨雀日記Ⅰ』未来社
加能作次郎（2007）『世の中へ　乳の匂い　加能作次郎作品集』講談社文芸文庫
神近市子（1963）「エロシェンコと金魚―ソ連で彼の全集が出たという」『世界』216，岩波書店，231–238
――――（1965）「エロシェンコの童話」『人物往来』昭和40年8月号，人物往来社，145
菊池明校訂・解題（1997）「逍遙日記　明治四十三年一月～大正二年十二月」『坪内逍遙研究資料第十五集』，逍遙協会，新樹社，3–123
――――（1998）「逍遙日記　大正三年一月～大正四年十二月」『坪内逍遙研究資料第十六集』，逍遙協会，新樹社，3–128
クマル・ガウリシャンカル（2010）「ラス・ビハリ・ボースと渋沢青花によるインド民話集について」『日本語・日本文化研修留学生修了論文集』12，大阪大学日本語日本文化教育センター，43–60
栗田英彦（2013）「国際日本文化研究センター所蔵静坐社資料―解説と目録―」『日本研究』47，国際日本文化研究センター，239–267
小林実（2005）「相馬黒光と“早稲田のドストエフスキー”」『立教大学日本文学』94，立教大学日本文学会，49–64
新宿歴史博物館編（2011）『新宿中村屋に咲いた文化芸術』新宿歴史博物館（展覧会図録）
鈴木利昌（2007）「岡田虎二郎の精神―春堂文庫と教えを伝えた人々」，田原市博物館編

『中原悌二郎と岡田虎二郎』（展覧会図録）所収，100–107
相馬愛蔵（1938）『一商人として』岩波書店（相馬愛蔵・黒光著作集刊行委員会編（1996）『相馬愛蔵・黒光著作集 2』郷土出版社に所収）
相馬愛蔵，相馬黒光（1952）『晩霜』東西文明社
相馬黒光（1936）『黙移』女性時代社（平凡社ライブラリー版『黙移　相馬黒光自伝』1999）
――――（1956）『滴水録』相馬愛蔵出版（一部は後に「ラス・ビハリ・ボース覚書」として竹内好編（1963）『アジア主義』筑摩書房に所収）
相馬黒光，相馬安雄（1953）『アジアのめざめ　印度志士ビハリ・ボースと日本』東西文明社（2011 年に『アジアのめざめ　ラス・ビハリ・ボース伝』として書肆心水から再刊。ただし「ボースの思い出」の部分は割愛されている）
高杉一郎（1982）『夜あけ前の歌』岩波書店
――――（1997）『ひとすじのみどりの小径』リベーロイ社
高杉一郎編（1959）『エロシェンコ全集Ⅰ』みすず書房
田原市博物館編（2007）『中原悌二郎と岡田虎二郎』田原市博物館（展覧会図録）
中島岳志（2005）『中村屋のボース』白水社（2012 年に白水 U ブックス版）
中西清三（1972）『ここに人あり　岡田虎二郎の生涯』春秋社
樋口哲子（中島岳志編）（2008）『父ボース』白水社（2012 年に白水 U ブックス版）
藤井省三（1989）『エロシェンコの都市物語』みすず書房
森下時男（2007）『探偵小説の父　森下雨村』文源庫
劉非（2009）「魯迅と『エロシェンコ童話集』」『熊本大学社会文化研究』7，熊本大学大学院社会文化科学研究科，221–231
早稲田大学大学史編集所編（1981）『早稲田大学百年史　第二巻』，早稲田大学出版部

付記：渋沢青花文庫の資料調査に当たっては、日本近代文学館とそのスタッフの方々にたいへんお世話になった。記して感謝申し上げる。

〈キーワード〉渋沢青花、相馬黒光、ラス・ビハリ・ボース、ワシリー・エロシェンコ、岡田式静座

Seika Shibusawa, Kokko Soma, Rash Behari Bose and Vasiliy Eroshenko

Masahiro GONOJI

In this article I describe the results of the research I made on the relationship between Seika Shibusawa, the writer of juvenile literature, and Kokko Soma, the manager of Nakamura-ya who is famous for her great contribution to the various fields of Japanese culture. In addition to that, I report the new facts I found about Rash Behari Bose and Vasiliy Eroshenko, both of whom had a close relationship with Kokko.

First, I make a supposition about how Seika and Kokko gained acquaintance with each other and became close friends, by investigating Seika's published memoirs and his unpublished diaries housed in the Museum of Modern Japanese Literature in Tokyo. What connected them was the Okada-shiki-seiza, the health management method through upright sitting invented by Torajiro Okada, which they enthusiastically put into practice. Besides, it is revealed that Masanosuke Katsurai, the assistant professor of Waseda University and close friend of Seika and Kokko individually, built ties between them indirectly after his sudden death.

Next, some new facts are described about Rash Behari Bose, the Indian revolutionary leader and husband of Kokko's daughter, who was naturalized in Japan and drove forward a revolutionary movement from there. He and Seika published two books of Indian fairy tales based on the English books. After Bose's death Kokko and her son made a book celebrating his life, titled *Asia no mezame* (The Awakening of Asia). I reveal that it was Seika who wrote the part of Bose's biography in that book, using the materials he gathered at Kokko's direction by interviewing many persons who had a relationship with Bose in life.

Lastly, I describe some new information about the relationship between Seika and Vasiliy Eroshenko, the Russian blind writer and Esperantist, who is mostly known as the writer of fairy stories in Japan. He received much favor from Kokko during his stay in Tokyo. I point out that it was Seika who took the well-known photograph of Eroshenko playing the violin accompanied by Kokko's organ, and that Seika helped them when they wanted to publish *Washi no kokoro* (The Eagle Heart), Eroshenko's short fairy story that was supposedly transcribed by Kokko.